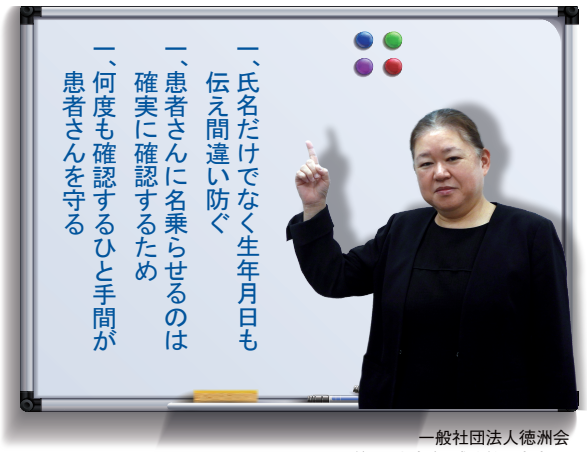
読み解く・読み得 紙上医療講演 91

名前・生年月日を確認する理由

医療機関を受診した際、患者さんは場面が変わるたびに自分の名前などを医療スタッフに伝えなければなりません。同じ日、同じ建物内にもかかわらず、何度も確認を求められることに対し、困惑する患者さんも少なくないのではないでしょうか。しかも、なぜ医療スタッフが名前を読み上げて返答するのではなく、患者さんに名乗らせる形式をとっているのか。その理由を一般社団法人徳洲会の深野明美・医療安全・感染管理部部長が解説します。



一般社団法人徳洲会
深野明美・医療安全・感染管理部部長

病院を受診したり入院したりすると、患者さんはスタッフから1日に何度も「お名前と生年月日を教えてください」と言われ、答えることがあります。「さっきも言ったのに…」、「聞かれるたびに答えるのは面倒」、「診察券の番号で管理しているのに、なぜ毎回確認するの？」と思われたことがある方もおられるのではないでしょうか。

じつは、この「何度も確認すること」には大切な理由があります。それは患者さんの取り違えによる事故防止にほかなりません。

医療の現場では診察、検査、注射、点滴、手術、薬の受け渡し、書類の受け取りなど、さまざまな場面で患者さんが間違っていないかを確認します。フルネームだけでなく、生年月日もスタッフに伝えるのは、名前や容姿が似ている方、同姓同名の方もおられるからです。

また、「○○さんですね」など医療スタッフから言われると、患者さんは自分の名前でなくても、自分の名前を呼ばれたと勘違いし、つい「はい」と返事をしてしまうことがあります。

かつて、ある大学病院で患者さんを取り違えて手術を行うという重大な事故が発生しました。当時は、医療者が患者さんの名前を呼び、患者さんが「はい」と答える方法が一般的でしたが、「それだけでは患者さんを確実に確認できない」とわかり、患者さんご自身にお名前や生年月日を言っていただく現在の方法が広く行われるようになったのです。



そして大切なのは、「一度確認したから大丈夫」ではないということです。診察室では診察を受ける患者さん、検査室では検査を受ける患者さん、薬を渡す時には、その薬を受け取る患者さんであることを、その都度、確認します。何度も確認するのは、職員が覚えていないからではありません。患者さんを取り違えることなく、安全な医療を提供するために、それぞれの場面で確認しているのです。

医療安全は、医師や看護師など医療スタッフだけで行えるものではありません。患者さんやご家族もまた“医療チームの一員”なのです。ぜひ安全な医療を実現するために、患者さんには次の協力をお願いします。

①名前や生年月日を聞かれた際には、何度でもお答えください。

②アレルギーや現在服用している薬、これまでの病気など、ご自身の情報をできるだけ正確にお伝えください。

③診察や治療について、わからないことや、「いつもと違う」、「これは自分の薬だろうか」と感じたなら、遠慮なく医療スタッフにお声がけください。

薬や書類を受け取る時にも、ぜひ一緒に名前を確認してほしいと思います。「何度も聞く」、「何度も答える」というひと手間が、患者さんを守る大切な安全確認になります。患者さんと医療スタッフが一緒に確認することで、より安全で安心な医療につながります。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

キラリ輝く Shine★職員

思いに寄り添うリハビリを

濵田夏海 中部徳洲会病院（沖縄県）理学療法士



中学時代に手指を骨折した際、骨の構造や体の仕組みに興味をもったことが、理学療法士を目指したきっかけです。出身地である与論島で、高齢の方々がリハビリテーションに励む姿を目にし、自分も力になりたいと強く思いました。

現在はICU（集中治療室）やHCU（高度治療室）での早期リハビリや、脳神経外科の患者さんを中心に担当しています。リハビリには「つらい」というイメージをもたれる方も多いため、少しでも楽しさを感じ、明日への意欲につながるような前向きな声かけを心掛けています。また、患者さんの「家に帰りたい」という思いに寄り添い、具体的な目標を共有しながらリハビリを進めることを大切にしています。

かつて離島応援で与論徳洲会病院へ赴いた際、地域の方々から温かい言葉をいただき、この仕事を選んで良かったと実感しました。今後は、忙しい現場のなかでも多職種と密に連携し、チーム医療の一員として貢献できるよう研鑽を重ねたいです。さらに、認定理学療法士の資格取得も目指し、専門性を高めて患者さんの復帰を支えていきたいと考えています。

お皿の上の健康 Recipe 105

感染症が気になる季節

温かい鍋で栄養しっかり
トマトすき焼き



朝晩の冷え込みが強まり、インフルエンザなど感染症の流行が気になる季節になりました。この時期に大切なのは、毎日の食事で必要な栄養をしっかり取ることです。タンパク質やビタミン、ミネラルを意識し主食・主菜・副菜をそろえた食事を心がけましょう。今回おすすめするのが「トマトすき焼き」（**写真**）です。トマトは抗酸化作用をもつリコピンやビタミンC、カリウム、食物繊維などを含んでいます。牛肉からはタンパク質や鉄分を取ることができます。トマトの酸味と、うま味が甘辛い割り下によく合い、いつものすき焼きとはひと味違うおいしさです。材料を切って煮るだけなので、忙しい日の夕食にもぴったり。栄養たっぷりの鍋で体を温めてみてはいかがでしょうか。

材料（1人分）

- トマト …… 1/3個(60g)
- タマネギ …… 1/10個(20g)
- 牛肩ロース薄切り …… 80g
- バジル …… 2～3枚

〈割り下〉
- みりん …… 大さじ1
- 酒 …… 大さじ1
- 醤油 …… 小さじ2
- 水 …… 大さじ1
- 砂糖 …… 小さじ1

つくり方

Step.1 トマトは湯むきして、くし形に切る。タマネギは1～1.5cm幅のくし形に切る。

Step.2 割り下をつくる。鍋にみりんと酒を入れてひと煮立ちさせ、醤油、水、砂糖を加えて砂糖が溶けるまで加熱する。

Step.3 **Step.2** の鍋を弱火にかけ、**Step.1** のタマネギを入れる。

Step.4 タマネギが少ししんなりしたら、牛肩ロース薄切りを重ならないように広げて入れる。

Step.5 **Step.4** の牛肉に火が通ったら **Step.1** のトマトを入れ、ひと煮立ちしたらバジルを載せて完成。

1 Point アドバイス

長ネギやキノコ類を加えると、食物繊維やビタミンなども補え、栄養バランスがより整います。トマトは仕上げ近くに加えると形が残り、ほど良い酸味が楽しめます。しっかり煮込めば、うま味が割り下になじみ、味に一体感が生まれます。お好みで加熱時間を調整してください。トマトの水分で味が薄まることがあるので、割り下は少しずつ加えるのがコツです。



武蔵野徳洲会病院（東京都）栄養管理室の土屋輝幸副室長（管理栄養士）

教えてドクター

頻繁でなければ問題なし

Question 耳かきは、しないほうが良いのでしょうか。（36歳・女性）

Answer 頻繁でなければ行っても問題ありません。目安は1～2カ月に1回程度。ご自身の耳垢の性質に合わせ耳かき棒か綿棒を用いて優しく耳垢を取り除いてください。耳かき自体が気持ち良い、かゆくて我慢できないなどの理由で毎日のように行うのは避けましょう。皮膚が刺激によって厚くなり耳穴が狭くなって掃除自体が難しくなったり、まれながら腫瘍が発生したりすることもあります。皮膚を傷つけることで浸出液が出て、カビが生えやすくなり、かゆみがさらに増す悪循環に陥ります。かゆみが落ち着かない時は皮膚科医や耳鼻咽喉科医にご相談ください。

よく「耳垢は自然に排出されるので耳かきは不要」とも言われますが、耳垢栓塞という病名があるとおり排出されず堆積することもあります。耳の中でガサガサ音がするなど、耳垢がたまってきていると感じれば、適度に耳かきしてもいいでしょう。プールやシャワーの水で耳垢が膨張して急に聴こえが悪くなったり、柔らかい耳垢の場合は綿棒で逆に押し込んでしまったりすることもあります。難聴の原因には治療が必要な疾患もありますので、聴こえが戻らない時は耳鼻咽喉科医にご相談ください。また、中耳の術後の耳内の清掃も耳鼻咽喉科医にご相談を。

お答えします



二井 一則
山形徳洲会病院耳鼻咽喉科部長、
日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会専門医・指導医

ただいま研修中!!

中尾 美貴

千葉徳洲会病院
初期研修医（1年次）



高校1年で参加した「1日医師体験」がきっかけとなり医師を志しました。消化器外科や呼吸器外科に興味があるため、1年目から手厚い指導の下、術後管理だけでなく手術にも積極的に参加できる環境や、2カ月間の離島・へき地研修に魅力を感じ、当院を研修先に選びました。

研修が始まり半年が経ちますが、とても恵まれた研修環境であることを実感しています。“断らない医療”を掲げる徳洲会病院だからこそ症例数は豊富ですし、習得したい手技があれば、何度でも機会をいただけます。また入院から退院までかかわる日々の研修で、治療方針だけでなく、チーム医療の大切さや退院調整の難しさなど、多くの経験と学びを通じて、さらに成長していきたいという思いが強くなっています。

現在は内科をローテート中で、ジェネラリストの道にも興味が湧いてきました。どのような専門に進んだとしても、つねに患者さんの立場で、真心を尽くす医師を目指し、研鑽していきたいです。



病棟で松村祐志・消化器内科部長（右）と入院患者さんの情報や診療方針を共有

多くの学びを重ねて成長